

# 国際交流に関する事業

- I 多様な人々が参加できる国際交流事業（アップウィズピープル）
- II 愛・地球博関連事業（フレンドシップフェスティバル）

## I 多様な人々が参加できる国際交流事業

### 1 非営利国際教育団体アップウィズピープル(UWP)\*受入事業

#### ■背景

T I AがUWPの受入れ開始をした96年度以降、00年度（01年度から03年度まではUWP側の事情で活動休止）までは、ホームステイ中心のボランティアによるサポートが主流であった。団体受入れのための事務処理全般や広報活動などは、全てUWP側から派遣されたスタッフ（先遣隊として毎年1、2人程度）が受入れ前後2か月間、T I A事務局内に場所を設け、作業に当たってきていた。活動休止に入る00年度までは、このような態勢で受け入れており、あくまでも事業主体はUWPであり、T I A事務局としては側面支援のホームステイ受入れに伴うサポートを行った。

しかしながら、UWPの活動が再開された04年度は、UWP側の組織の再編に伴う受入れ態勢の変更により、T I AへのUWPスタッフ派遣が叶わず、ホームステイはもちろんのこと事務処理・広報・地域での活動場所の確保など結果的に受入れに伴う業務全般をT I A事務局が負うこととなった。

UWP側からの協力をより一層得るために、そして、T I A側の受入れ態勢の見直しを行い、混乱を極力避けるために05年度からは、UWP受入れをT I Aの事業と位置づけ、よりよい態勢の構築に向けて事務局内での業務の円滑化を図った。

\*非営利国際教育団体アップウィズピープル（略称：UWP）本部：米国コロラド州デンバー

「世界の若者にリーダーシップとボランティア精神、そして国際的な視野を身につけて、国と国との相互理解を深めて欲しい」という願いを込めて、1965年、J. Blanton Belk氏によって設立されました。今では世界各国の賛同を得て、次の世代のリーダーを育成する非営利の国際教育団体として認知されています。発足以来、世界70カ国より19000人を越える若者が参加し、日本人参加者も400名に及びます。（UWPホームページ：<http://www.upwithpeople.org>より抜粋）

#### ■目的

愛・地球博の開催とその後の諸外国との交流の一つとして、将来の地域のリーダーを育

成する目的を掲げる国際教育団体UWPの受入れに伴う業務全般を行うことにより、市民の交流の一助とする。また、地域での諸活動に関する企画立案を通じて、受入れ施設との連携を図り、豊田市の特徴を活かしたこの地域らしいよりよいプログラムをUWP側に提示し、UWPの学生たちに多様な学習内容の充実に貢献する。

## ■内 容

UWP受入れに関しては、前述したように受入れに伴う事務作業全般・広報・地域活動受入れ場所との調整・交流会（コミュニティセレブレーション）準備等をT I A事務局がUWPの地域担当者とともに、ホームステイ関係と交流会の企画・司会進行をT I Aボランティアグループであるオープンハートホームステイクラブ（以下、オープンハートとする）が、それぞれ担当した。

主なものとして、

- 1) UWP受入れのための実行委員会の開催（計5回）
- 2) 豊田市の広報紙『広報とよた』・T I A機関誌『サンフラワー』及びホームページ・市内関連団体などに広く情報を提供・配布
- 3) ホームステイ受入れ家庭の募集とホストファミリーのマッチング・説明会の開催
- 4) 大型バス駐車場の確保と豊田市滞在中の拠点場所の確保
- 5) 地域活動場所との調整全般（バス手配・内容の打合せ・通訳手配・引率）
- 6) 交流会の開催・手配（会場確保・会場準備・アトラクション補助・進行）
- 7) UWP事務局との調整（5月～06年3月）
- 8) その他（愛・地球博会場見学／トヨタ自動車工場及びトヨタ会館見学）

など、が挙げられる。以下、その概要をまとめた。

### 1) 実行委員会の開催

- ① 開催場所：とよた市民活動センター会議室（T-face 9階）
- ② 開催日：6月から9月までの土曜日又は日曜日の午前中2時間程度
- ③ メンバー：UWP地域担当者・UWP同窓生サポートチーム・オープンハートボランティア・三好町国際交流協会担当者・豊田市国際交流協会担当者
- ④ 主な協議事項：UWP来豊日程確認・ホストファミリーとの調整事項・地域活動先の選定・進捗状況・交流会企画・説明会／反省会概要など
- ⑤ その他：実行委員会の開催場所は、公共交通機関と駐車場の両利用者にとって至便な場所を設定した。

### 2) 広報については上記の媒体を通して、随時行った。

### 3) ホームステイ関連

上述のとおりホームステイに関しては、ホストファミリー募集からマッチング作業、また事前説明会や反省会までオープンハートが中心となって行なった。

ホストファミリー申込みでは、上記媒体を通し8月からを開始したところ、2週間ほどで定員である40家庭の申込みがあった。そのためオープンハートがホストフ

ファミリー探しに奔走するという心配は要らなかった。

UWP豊田市到着の1週間前9月10日（土）にはT I A大会議室にて事前説明会を行なった。当日はオープンハートが司会進行しながら、今回のスケジュール等の連絡事項を説明するほか、今回が初めてのホームステイ受入れとなるホストファミリーのために、ベジタリアンのための献立等を紹介した。

反省会はUWP豊田市出発1週間後の10月1日（土）にT I A大会議室にて行なった。内容については後述。

#### 4) 駐車場とUWPの豊田市における活動拠点

##### 豊田スタジアムの協力

T I A事務局は駐車スペースが限られているということ・利用可能な部屋数がUWPの人数に比べて十分に確保できないということ、などがあり、04年度以降、豊田スタジアム（以下、スタジアムとする）に会議室と駐車場を一部有料で提供してもらい、利用に際してもスタジアム職員から多大なサポートを受けてきている。

#### 5) 地域活動

①目的：UWPの学生たちが訪問した地域コミュニティの諸施設で、交流を深め、そこでのボランティア活動及び協同作業を通して、地域リーダーとしての資質の向上を目指す。また受入れ団体においても、このような機会を活かして、市民と世界各国から集ったUWPの学生たちとの草の根の交流を促進する。

②活動日時：05年9月21日（水）午前10時～午後3時

③活動先：けやきワークス（身体障がい者通所授産施設）

財団法人あすてボランティアグループさくら（地域在住の外国人市民との交流促進の場を提供しているグループ）

財団法人オイスカ（アジア地域の農業研修生受入れ団体）

トヨタ自動車元町工場（生産工程などに関するワークショップ）

三好町カヌー体験（豊田市に隣接する三好町におけるカヌー指導）

④活動内容：詳細は別紙UWP作成『Up With People 日本ツアー2005年秋報告書』（資料交流-①）を参照。各活動場所には、UWP学生の他に、UWP同窓生・T I Aから派遣した通訳・T I A職員が1～2人同行した。また、けやきワークスを選択した学生たちと三好町に向かった学生たちは、それぞれ同日、市長・町長への表敬訪問を行い、約1時間程度、首長との闊達な意見交換ができた。

#### 6) 交流会

①目的：地域活動やホームステイを通して知り合った地域の人々にUWP側からのパフォーマンス（コミュニティセレブレーション）を披露し、彼

らの活動の周知を図るとともに、地域活動や通訳などでお世話になった方々への謝意を込めて、リラックスした雰囲気での交流パーティーを開催する。

- ②開催日時：05年9月23日（金）午後6時～8時
- ③会場：JAホール（JAあいち豊田所有）
- ④内容：お華・お茶など日本文化紹介コーナーの設置（協力：T I A日本文化紹介グループボランティア）・UWPによるパフォーマンス・関係者スピーチ・立食形式パーティー
- ⑤その他：会場の確保と調整・ボランティアグループへの働き掛け片付けなどはT I A事務局で担当。パーティーの企画・メニューの調達・司会進行はオープンハートが担当。

## 7) UWP事務局

- ①体制：UWP日本オフィスからは3人が担当（内、1人がT I Aを始めとする日本国内の受入れ地域のコーディネートを担当。99年度のUWP受入れ豊田地域スタッフ経験者）
- ②連携：05年度からはT I A事務局の事業と位置づけ、より効率的な受入れ態勢の構築に努めた。04年度と同様、近隣からは三好町の参画もあり、賑やかな実行委員会となった。原則として、UWP日本オフィス又は地域担当者との窓口はT I Aが務め、そこからボランティア・通訳・三好町・地域活動受入れ施設に連絡事項を伝達するという方式を採った。UWP同窓生を含む関係者については、全てUWP側をお願いをした。UWP側の担当者（地域コーディネータ）は以前にもUWPスタッフとしてT I A事務局職員と共に仕事をした経験もあり、T I Aや豊田市についての情報共有がスムーズに図れた。説明会や反省会の内容についても事前事後の協議が十分にでき、よりよい連携がとれたと考えられる。

## 8) その他の活動

- ①愛・地球博：05年は愛知万博開催に当たり、世界各国の出身者で構成されるUWPにとっては、日本で自国がどのようなパビリオンを開催し、それらが日本人の目にどのように映っているのかを肌で感じられる絶好の機会であるため、従来の来日スケジュールを変更（04年度までは10月中旬～11月上旬の秋の一定期間を豊田市の訪問に当てていた）して万博見学に万全を期した。万博会場は、閉会間近ということもあって、入場制限や大変な混雑も想定されたが、当日は会場内もスムーズに移動でき、自分の出身国のパビリオンに感動したUWPの学生も少なからずいたようである。

- ②トヨタ自動車：UWPを日本に招聘し、豊田地域ではその受入れ窓口をT I Aが担当して以来、財政支援始め様々なサポートをしてもらっている。トヨタ関連の会社の社員を対象とした秋のイベント（オールトヨタビッグホリデー）への出演やUWPショー（00年度までは、豊田市民文化会館などでミュージカルショーを行った）への側面支援、会長との面談及び意見交換、移動に伴う大型バスの手配など多岐に亘る支援が得られた。

## ■効 果

04年度はUWP側の地域担当者も兼務で担当しており、また、昼間は会社勤めのため受入れのための十分な態勢がとれなかった。T I A事務局においても、事業としての位置づけではなく、ホームステイがメインでボランティアグループの側面支援と捉えていたため、予想外の仕事が増え、一時的にはオーバーワークとなった。

その反省をもとに、05年度はUWP側にも改善の声を届ける一方、T I A内でも事業担当者を増員し受入れ態勢を整えた。UWP側も、地域担当者が日本ツアー全てに同行し、それぞれの地域で、実行委員会や同様の組織に毎回出席。地域とのコミュニケーションを図る努力をしてくれた。その結果、会場の下見や地域活動先との打合せ、ホームステイボランティアへの説明など、UWP・T I A、そしてオープンハートの連携が密になり、情報の共有化が図れた。

通訳については、T I AボランティアグループE－I F Fに依頼し、地域活動に同行してもらったり、交流会に参加してもらったりして、UWPの学生のみならず引率スタッフとの交流も積極的に行われた。さらに交流会では日本文化紹介グループのボランティアの協力も得られ、T I Aボランティアとして参画の場面を複数回提供することができた。これらは、ホームステイを担当したオープンハートの配慮で、UWP受入れを通じてボランティアグループが横断的に関わることにより、ボランティア同士の交流・連携の場になるとよいという考えからであった。今後も、交流会や地域活動の場におけるより多くのボランティアの関わりを継続していくことが望ましい。

ホームステイの反省会は、とりわけ意義深いものであった。というのも、ホストファミリー経験が何度もある家族から、『日本からUWPに参加している学生が「折角の機会なのに、海外出身者ではなく日本人の学生のホストになって頂いてすみません」ということを言ったので、「私たちは、ただ単に外国人だからホストファミリーを引き受けているのではない。UWPに学生として参加しているあなたのような日本人と交流することが家族にとっても刺激的な経験となるから」と伝えました』とか、「日本人の学生を受け入れたのは（ペアでステイする学生の）通訳代わりとして考えたからではない。国籍は問わず、何人（なにじん）であろうと自分たちがしていない経験をしている人と交流したかったから」という意見が複数あった。ホームステイボランティアは決して軽い気持ちでできるものではないし、さりとて必要以上に構えることもない。あくまで自然体で、家族が異なるバックグラウンドを持つ人々と触れ合う機会を得るボランティア活動である。今回のホストファミ

リーの後日談を聞いて、ボランティアをすることに純粋な感動を見出し、「ホストファミリーをさせてもらって感謝している」とコメントしていたボランティアの人々の姿が殊のほか印象的であった。UWPに参加している学生たちが「ホームステイをさせてもらっている」という感覚を持っていることは比較的容易に我々も想像できるが、ボランティアから「こちらがボランティアをさせてもらって感謝している」という感想が発せられる場面を目の当たりにし、担当者としても心が揺さぶられるような貴重な経験を得た。ホストファミリーとなってくれたボランティアに、UWP受入れを通して、このような感動を提供できたとしたら、ボランティア活動の醍醐味を伝えるのにこれに勝る奏功はないであろう。

## ■課 題

UWP受入れが終了した時点で、ホストファミリー対象の反省会（オープンハート主催）と事務局の内部反省会（資料交流②）、そしてUWP関係者との反省会を設けた。ホームステイに関しては、今年度反省会に出ていたことを、来年度以降の説明会において活かしていくことになり、ボランティアグループの中で共有していくことが肝要と考えられる。

オープンハートは、ホームステイ経験が豊富なボランティアたちで結束されており、不測の事態（05年度は、ホストファミリーに不幸があり、途中から学生を預かれなくなった・UWPの学生の父親が危篤となり、急遽帰国することになった、等への対応も全て連絡をすぐに取り合っ、UWP側とも協力して解決に努めてくれた。ただし、対処に精一杯で事務局への連絡が滞ってしまったり、タイムラグができてしまったりするなど、T I A側の把握が遅くなる場面もあった。事務局としても、ボランティアにはなるべく負担がかからないよう、極力連絡体制を密にすることが必要である。

また、場所については、前述したようにT I A事務局が入居している現在の施設では、部屋数や駐車場に限りがあり、50人～100人規模の団体ともなると、受入れは困難である。00年度までは十分な広さのある建物にT I A事務局があったので、特に問題はなかったが、04年度にUWPが再開された時は、T I Aも移転した後で、大人数の団体に対応できる収容能力は到底望めないという事態が生じた。幸いスタジアムの協力が得られ、ホストファミリーのマッチングから受入れ期間中のUWP学生の研修用の部屋やショーのための大道具類を運搬する軽トラックの駐車など、全面的な支援があった。施設の使い勝手がよく、市内の中心地やT I A事務局にも近いスタジアムはロケーションとしても申し分はない。

しかしながら、一週間以上も豊田市に滞在するにも拘らず、UWPのスタッフや学生たちがほとんどT I Aの活動場所を見ずして次なる目的地に旅立っていくことは、少々寂しい感が拭えない。国際親善・交流とは言いながら、豊田市での拠点となるT I Aを訪れることなくして、去っていてもよいのだろうか。これは、UWP側にとっても豊田市の現状を見るチャンスを失っており、折角さまざまな国から感受性の強い青年達が来ているのに、日本語教室の状況やそれを支えるボランティアの活動の片鱗を感じ取ることができないまま通り過ぎるのは残念であろう。この点は、受入れをしているT I Aの施設側の問題であり、今後、UWPだけではなく、類似のプログラムの受入れを推進していくのであれ

ば、T I Aの活動のみならず、豊田市内の多文化・多様性の現状を垣間見てもらえるような場所と時間を確保できるようハード面の整備は急務である。

最後に、05年度は、担当職員2人とUWP側の地域担当者1人が対応した。06年度以降の事務連絡体制は再検討する必要がある。UWPが来豊するのは、諸行事が目白押しの多忙な期間で、マンパワーが十分に投入できない可能性も高い。05年度はUWPツアーの学生数も控えめで、地域活動も万博の見学が丸一日入っていたので、多少は負担が軽減できた。しかしながら、06年度は交流会のショーも従来のUWPが行っていたミュージカルにより近い形で力を入れたものにしたいというUWP側の意向もあり、学生数も増加が見込まれる。00年度までのUWPの学生数と遜色のないような大所帯での移動ともなれば、受け入れ側の負担も増大する。事業と位置づけたからには、T I Aも担当者の増員（臨時職員等の採用）をも視野に入れながら、今後の事務局体制を整備していくことが必須である。

## Ⅱ 愛・地球博 関連事業

### 1 未来へつなげよう 愛・地球博 10か国フレンドシップ・フェスティバル

#### ■ 背 景

愛知県内の各市町村で「一市町村一国フレンドシップ事業」が実施され、豊田市においても英国・韓国・フィンランド・カザフスタン・ロシア・米国・ネパール・スリランカ・メキシコ・パプアニューギニアの10か国のホストシティとして、市町村合併前の地域が中心となり草の根の国際交流活動を実施してきた。T I Aは豊田市からの委託を受けて市町村合併前から交流を進めてきた英国・韓国・米国・メキシコとの交流を中心に事業を実施してきた。

愛・地球博が05年9月25日に終了し、開催を通して得たかけがえのない財産を未来につなげていくため、市民主体の国際交流や、ボランティア活動を継続していくことが、次代を担う人材を育成し、活力ある都市づくりのために不可欠と考え、地球市民村に代表される市民主体のボランティア活動を今後につなげるためのイベントを企画していた、財団法人あすてと共催して「未来へつなげよう 愛・地球博 10か国フレンドシップ・フェスティバル&地球市民村inあすて」の開催にこぎつけた。これまで「一市町村一国フレンドシップ事業」に携わってきた団体、市内外のNPO・NGO、ボランティアグループに呼びかけ、愛・地球博開幕1周年を記念して、06年3月24日・25日に05年度フレンドシップ事業最大のイベントとして開催した。

3月25日のイベントは鞍ヶ池公園の「愛・地球博フレンドシップ10か国記念交流会」とあすての「地球市民村」の2会場で行われたため、両会場をシャトルバスで結ぶとともに、チラシ・ポスターを含む広報活動、シャトルバス運行のための調整、企業との交

渉などにおいて、あすてと協働して事業を推進した。

## ■目 的

愛・地球博、一市町村一國フレンドシップ事業をきっかけとして市民の間で育った草の根の国際交流が、万博終了後も継続していく一助となるよう提案、実施した。

## ■概 要

- 1) と き：06年年3月24日（金）～ 3月25日（土）
- 2) 場 所：名鉄トヨタホテル（豊田市喜多町1丁目140番地）  
豊田市鞍ヶ池公園（豊田市矢並町法沢714の5番地）  
財団法人 あすて（豊田市本町本竜43番地）
- 3) 主 催：10か国フレンドシップ・フェスティバル実行委員会、地球市民村inあすて  
実行委員会、（財）豊田市国際交流協会、（財）あすて、豊田市、豊田市教育委員会
- 4) 後 援：愛知県、（財）2005年日本国際博覧会協会、愛・地球博ボランティアセンター、市民フォーラム21・NPOセンター、豊田商工会議所、岡崎商工会議所
- 5) 協 賛：トヨタ自動車（株）、アイシン精機（株）
- 6) 参加者：①10か国大使・公使・領事、企業関係者、関係団体、留学生、研修生  
②地球市民村出展団体  
③（財）あすて所属団体  
④国際交流団体  
⑤市内学校、各種団体  
⑥一般市民

## ■内 容

### ①愛・地球博記念10か国円卓会議&フレンドシップコンサート

開催日時：06年3月24日（金）午後2時～5時

会 場：名鉄トヨタホテル 金扇の間

来場者数：約450人

内 容：a) 記念講演

講 師 マリ・クリスティーヌ氏

2005年日本国際博覧会 広報プロデューサー

テーマ 「愛・地球博が残したものと、今後の草の根の国際交流」

b) 愛・地球博記念 フレンドシップ10か国円卓会議

参加者 10か国代表（ネパール、カザフスタン代表は欠席）、豊田市長、  
T I A理事長、マリ・クリスティーヌ氏、ブストス・ナサリオ氏（コーディネーター）

意見交換のテーマ

開催テーマ「自然の叡智」と「愛・地球博」に対する評価、「一



市町村一國フレンドシップ事業」への豊田市の取組み、「一市町村一國フレンドシップ事業」と「ナショナルデー」への市民参加、今後の市民レベルの国際交流のあり方と期待すること、市民レベルでの国際交流に対して協力できることなど  
\*同時通訳付で実施

- c) 愛・地球博記念 10か国フレンドシップコンサート  
出 演 The Brass Party, Music of the Heart, ブリティッシュスクール（東京）の生徒
- d) 愛・地球博記念フレンドシップ10か国交流レセプション \*会費制  
会 場 名鉄トヨタホテル レストラン「ボナール」

## ②愛・地球博フレンドシップ10か国記念交流会

開催日時：06年3月25日（土）午前10時～午後4時

会 場：鞍ヶ池公園プレイハウス一帯

来場者数：約35,000人

- 内 容：a) 10か国舞踊・音楽演奏、パネル展、ワークショップ、各国料理模擬店、スタンプラリー、「ムーミン一家」ぬいぐるみショー
- b) 英国パビリオン「英国庭園」、米国「ハナミズキ」、韓国「もみの木」一般公開開始セレモニー  
3か国代表が登壇、あいさつ、テープカット、セレモニー終了後、VIP・関係者はバスにて植樹場所の視察、もちつき交流（場所：四季の古里）を行った。
- c) 樹木が移植されたポイントを回るスタンプラリー（1,000人参加）
- d) VIP昼食会  
会 場 トヨタ鞍ヶ池記念館

### <出演団体>

豊田市立若園中学校、豊田市立竜神中学校、稲武ネパールダンスチーム、ユールメイプル、オカリナグループ、チアーズ（ハンドベル）、ラボ国際交流センター、桜花学園大学チアリーダー部メンフィス、豊田ゴスペルクワイヤ、桜花学園大学留学生、Toyota New Public Orchestra

### <出展団体>

英国ダービーシャー市民交流会、ラボ国際交流センター、日韓親善協会、イシダフォトスタジオ、伊保小学校、大林小学校、桜花学園大学留学生、M&Mキルトスタジオ、グループアステカ、自立のための道具の会、あさひイベントクラブ、(株)三州足助公社百年草事業部、大野瀬農産物加工組合、スバカマナ（ネパール料理など）、小原和紙ワークショップ、香恋の里しもやま観光協会、手づくり工房山遊里、しもやま元気そば愛好会、

藤岡国際交流協会、藤岡商工会、高嶺フォーラム、ヒッポファミリークラブ、豊田商工会議所、オイスカ中部日本研修センター

### ③参考

「地球市民村inあすて」

開催日時：06年3月25日（土）午前10時～午後4時

会 場：あすて

来場者数：約5,000人

内 容：愛・地球博地球市民村出展団体を中心に豊田市内外から選出したNPO・NGO団体が参加しパビリオン出展、パネル展を実施  
\*体験型展示、ワークショップ、ネイチャーゲーム、レストア車試乗会、I-UNIT撮影会、パートナーロボット演奏、フードコーナーなど

### ■効 果

フェスティバル1日目は名鉄トヨタホテルで行った記念講演、10か国代表による円卓会議、フレンドシップコンサートに約450名の市民が参加した。2日目は鞍ヶ池公園において、英国・米国・韓国からの寄贈樹木の一般公開セレモニー、樹木が移植されたポイントを回るスタンプラリー、ステージでは10か国に関連する団体の音楽演奏・舞踊、芝生広場ではテントを設営しボランティアで募ったフレンドシップ国に関連する各団体が活動紹介やワークショップ、飲食店の出店などが行われ、当日の天気にも恵まれ、約35,000人の市民が参加した。多くのボランティア団体から協力を得ることができ、大規模なイベントとなった。事前準備、当日の運営に関ったスタッフにとっては大変な苦労はあったが、大きなケガや事故もなく多数の市民の参加を得て成功裏に終ることができ、また、今後の草の根国際交流を考えてもらえる良い機会となった。05年度を締めくくる最大のイベントが、今後市民の間において様々な形で効果を発揮するのを期待している。

### ■課 題

このイベントが起爆剤となって様々な形で草の根の国際交流が生まれることを期待しているものの、市民の間にどの様に浸透して、どの様な効果を発揮するのかは想定できない。今回協力してくれたボランティアグループ、今回参加は出来なかったが国際交流・国際協力活動を行っている市民団体、これから何か始めたいがどの様に始めればいいのか分からないとためらっている人々の声を形にしていく仕組みづくりが今後の課題となる。

## UWP 地域活動一覧

日にち	1	2	3	4	5
21日(水)	トヨタ自動車 元町工場	オイスカ中部日 本研修センター	あすてボランテ ィアグループさ くら	けやきワークス 豊田市長表敬	三好町 三好町長表敬
参加人数	9(学生)・4(引率)	8+3	7+4	8+4	11+1+MIA
	10:00 出発 10:30 到着予定 10:30-11:30 生産ライン見学 11:30-12:00 グローバル生産推 進センター概要 説明 12:00 昼食(食堂) 13:00-15:00 トヨタ生産方式体 験ロールプレイング 15:00~30 出発	10:00 出発 10:30 到着予定 御船町で終日 稲刈り (長袖・長ズボ ン・軍手) 12:00-13:00 昼食 13:00 稲刈り続行 14:30 オイスカ帰着 意見交換 15:30 出発	10:00 出発 10:30 到着予定 日本料理の実習 (エプロン) 12:00 試食兼昼食 13:00 和紙人形の作成 14:30 意見交換など 15:30 出発	10:00 出発 10:30 到着予定 全員で 館内ツアー(30 分)その後、 環境美化活動 12:00 昼食(食堂) 13:00 A班:作業 作業場にて袋詰 め・組立作業 (作業用服装・ サンダル不可) B班:Tシャツ 作り (A・B入れ替え) 15:00 終了⇒着替え 15:20 出発 15:45 豊田市長表敬 16:30 出発	10:00 出発 10:40 到着予定 町長表敬訪問 12:00 昼食 カヌー体験 ツーリング カヌーポロ
UWP 引率	挨拶等通訳 UWP スタッフ	挨拶等通訳 UWP 学生	挨拶等通訳 UWP 同窓生	挨拶・表敬通訳 UWP 地域担当者	挨拶・表敬通訳 UWP 引率なし
TIA	役員1 職員1	職員1	職員1	職員1	MIA
ボランテ ィア通訳	トヨタ対応	E-IFF ボランティア	同	同	MIA手配

## 2005 年受入れに伴う次年度への申し送り事項（抜粋）

T I A 事務局作成

### 【全体について】

#### 1. 受入れ形態の再考

実行委員会形式の是非(多くの人と共有できる反面、日程調整や実務面への反映が困難。UWPのスタッフとTIA事務局で実務面・調整役を担当し、ホストファミリー関係や交流会はオープンハートという役割分担毎に動いてもよい)

#### 2. 準備時期の早期確定

UWPのツアー日程や規模がおおよそでもわかれば、2006 年度は早期に態勢を整えたい。それに合わせて広報やPRももっと充実していきたいし、ホストファミリーの確保にも努めたい。

#### 3. 予算の決定

地域活動や交流会など、日程調整や部屋の確保を早めに行う必要もあるので、実務担当者が始動する前にトップレベルでの確定をお願いしたい。予算の明示については地域活動受入れ施設からも強い要望があった。

#### 4. フィードバックの形式

UWP学生たちが豊田市での活動を振り返ってまとめたレポートや評価用紙があるとよい。できれば、次の滞在地に向かう前にTIAや施設・ホストに渡してもらえるとよい。

### 【施設の使用について】

スタジアム…ゴミの分別や机・いすの配置から部屋の復元については、今後も協力的に行ってほしい。

駐車場…有料が一般的。

J A ホール…使い勝手がよく交通至便なので、UWP側(使用料・機材関係)さえよければ来年度以降もなるべく確保したい。

その他…豊田市内の公共施設には自販機が設置されていないことを事前に周知。

### 【地域活動について】

地域活動で提示された内容がUWPの活動目的に合っているかを検討したい。例えば一日中稲刈りでよいのか、それがUWPの活動にどう反映できるのかをその他の施設での内容も含めてUWP側と共有したい。地域活動の十分な事前学習が必要なのではないか。資料を読んで、活動内容やUWPとの関連、訪問の目的などを学生に周知する。また、UWPのテーマがツアー毎にある(05 年は「移民」と聞いた。もしそのようなものがあれば、それに沿った受入れプログラムを検討できるので、来日前にテーマがわかるとよい。

### 【その他事務処理関係】

UWP側のデータやファイルをより使い易くするために工夫する余地はあるか。

# 国際理解教育推進のための事業

- I 国際理解教育セミナー事業
- II 推進のための情報発信事業（国際理解教育ニュースレター）

## I 国際理解教育セミナー事業

### 1 T I A 国際理解教育セミナー

#### ■目的

参加・体験型の手法を通して、人権・開発・多文化／多言語といった現在及び将来に亘って懸念される地球規模の課題と自分たちとの関係を考え、その解決に向けて家庭・学校・地域で実践的な行動を起こすことができる市民を育成する一助となる場を提供することをねらいとする。

#### ■場所・参加者・内容

##### (1) 連続セミナー『児童英語で国際理解教育～英語の授業、こうやってみよう』

第1日目 8月6日（土）基礎編「人の五感～セルフエスティームを育む英語学習」

第2日目 8月7日（日）応用編「大韓民国～異文化理解を教材に」／共にT I A

講師 町田淳子（BeLL Works主宰。元グローブ・インターナショナルティーチャーズサークルスタッフ）

参加者 24人（教員・塾講師・ボランティアなど）

内容 【基礎編】初めてこのようなセミナーに参加した人を対象にワークショップ形式で進める。ゲームや歌に終始しない英語の授業に欠かせない教材やテーマを満載した書籍・印刷物も同時に紹介した。前半は、英語で国際理解教育を進める強みや進め方を学ぶ。後半の模擬授業については、セルフエスティーム（自己尊重）をテーマとして、感覚に訴える平易な英語（see/hear/touch/など）で表現しながら、自己と他者の感性の尊さを共有。

【応用編】セミナー2日目。ある程度小学校の英語の授業を担当した経験のある教師や昨年度行った同講師によるセミナーに参加した経験のあるリピーターを対象とした。前半は「大韓民国」をテーマに異文化理解や歴史認識を扱い、英語で模擬授業を行う。地図やハングル（韓国・朝鮮語の文字）も登場し、視覚に訴える興味深い教材も提示された。後半は、2日間の総まとめとして、4時間分の授業プランをグループで練り、

発表。小学校の現場や塾などで子どもたちに英語を教えている人々から問題提起され、意見交換が行われた。講師への質疑の後、2日間の感想を述べ合って終了。

**効 果** 国際理解教育の視点から進める手法や教材が多数紹介され、参加者の満足度も高かった。05年度で4回目を迎える本セミナーだが、リピーターも出てきた。今回も2日間連続受講する人々もいた。実践における理念や姿勢を丁寧に伝えながら模擬授業を行う講師の評価も高い。連続セミナーは初めてであったが、2日目には指導案を作成するというところまで到達できた。

しかしながら、セミナーで充実した学びを得れば得るほど、熱心な受講者から「ほとんどの小学校で行われているようなお遊び的な英語学習では中学校の英語とのギャップがあり、積み上げにならない。今回のように意味のある英語を教えたい」という参加者の感想にも表われているように、05年度で4回目となる本セミナーへの評価は高い。

**課 題** 参加者がコメントしていたように「英語の授業はALT（外国語指導助手）にお任せ」という教師も少なくなく、現場の日本人の教師が英語学習の目指すところや具体的なノウハウを学ぶことができるこの種のセミナーについての周知が十分になされていない。他市の国際交流協会等、幅広い広報活動が必要とされる。

## (2) 「世界がもし100人の村だったら05年版」

12月3日(土) 13:30~16:30 / 豊田中央図書館6階多目的ホール

**講 師** 平野木恵 (西三河国際理解教育情報センター主宰)

**参 加 者** 22人 (NGOなど団体職員・ボランティア・中学生・小学生など)

**内 容** ベストセラーの『世界がもし100人の村だったら』(現在3部作で刊行)を底本にワークショップ形式で世界の富の不平等や環境・人権問題を捉えることを目指した。また、世代や性別を超えて、参加者同士が意見を自由に交わし、活発な学びの場を提供したいという講師の狙いから小学校高学年\*以上ならば誰でも気軽に参加してもらえるよう内容を配慮した構成を試みた。例えば、下記のようにテーマを設定するなど工夫を凝らした。

【他の国に生まれ変わってみよう】メッセージカードを使い、「他の国の人間になりきって」挨拶や言語、人口などの詳細な情報を共有し、世界の状況を大雑把に把握する。【大陸ごとに分かれよう】世界の人口を縮小し、大陸ごとにグループを作り、自分たちの大陸が抱えている課題や日本とのつながりを考える。【世界の富の不平等を感じよう】ジュースの分配を例にとり、世界の富がいかにかアンバランスに分配されているかを体験する、など。

最後は、オープンエンドではなく、今後、行動に移せるように各人が「これから積極的に関わっていくこと・自分が今日からできること」を主体にメッセージカードを作成。その中で参加者一人ひとりが本ワークショップから学んだことを文字にして意識化できるように働き掛けた。

**効 果** 子どもから大人まで、そして市内はもとより、近隣の市町からも参加者が集った。子どもの新鮮な視点で世界の状況を見ることができた、具体的な数字や世界の貧困状態を知識だけではなく活動を通して学べてよかった、などの感想も聞かれ有意義な学びの場を提供することができた。また、開催場所となった豊田市中央図書館との協力・連携を通して、市内施設における協働事業の第一歩とすることができた。

**課 題** タイトルをベストセラーの書籍のそれをそのまま使用するなど、内容が堅苦しい雰囲気醸成することを極力避けたのだが、やや難しいイメージが先行し、子どもの参加人数が予想よりも少なかった。また、参加者は地球規模の課題に関して意識の高い人が多く、活発な意見が交換されたのは嬉しい限りだが、どちらかというと、普段このような内容に触れることが少ない層の参加も目論んでいたため、その点では広報が充分に行き届かなかったのかもしれないという反省点が残る。今後はターゲットにする層を意識して、平明なキャッチコピーのちらしや案内を作成し、周知することが肝要である。

\*「貿易」・「世界」といった学習内容の履修が小学校5年生以上である学校が大半なので、このような線引きを行ったが、個々人の興味関心に応じて、小学校中学年でも参加申込みがあれば受け付けることとしている。

### (3) 「地域と文化のセミナー まるごと中国講座パート1」

06年2月26日(土) 13:30~16:30 / キラッ☆とよた 調理室・会議室  
(とよた男女共同参画センター)

**講 師** 李 萍蘭 (T I A 中国語講座講師、兼中国語相談員)

**進 行 役** 竹田敦子 (T I A 職員)

**参 加 者** 21人 (会社員・中国語学習者など)

**内 容** 市内の多文化をテーマとした本「まるごと講座」もシリーズ3回目を迎えた。ブラジル・韓国に続き、今回は中国にスポットを当て、その文化や習慣など側面に幅広く触れることのできる機会を設けた。前半は中国の意外な側面を知るワークショップ(人口・民族・言語などを中心にしたもの、特に講師の出身である青海省の地形や文化・習慣についての言及あり)後半は旧正月に代表される中国の料理(菘菜合ニラ玉入り

中華風おやき) を作り試食しながら、食文化への理解を深め、参加者同士の親睦を深めた。

**効 果** 料理教室と勘違いをしていた参加者もいたが、ワークショップでは自己紹介から始まり、中国を知る活動や講師の故郷である中国青海省の講話などに耳を傾け、質問多数で時間を超えるくらい熱意溢れる雰囲気があった。

地元のケーブルテレビや新聞社の取材も入り、講座は活況を呈した。

**課 題** 中国に関心のある市民層は厚いので、今後も継続して取組むとより効果的であるが、講義や参加型ワークだけでは、恐らく「敷居が高い」というイメージが払拭できないので、今回のように料理などの体験的な内容を講座に盛り込み、平易な内容であることをアピールするとよいのではないかと。

このシリーズを開始した頃は、ブラジルに次いで韓国・朝鮮出身者が市内の外国人登録者の上位1位・2位をそれぞれ占めていたが、04年度からは中国出身者が急増し、2位と3位が逆転して中国出身者数が韓国・朝鮮出身者数を上回った。ただし、中国は国土が広大な上に、当然のことながら出身者の省も多岐に亘っているので、敢えてセミナーのタイトルに「パート1」と銘打って、複数回実施することを暗示するキャッチコピーとした。06年度以降も今回フォーカスしていない地域の出身者(ベトナムやインドネシアなど)を講師に招いた講座を展開すると参加者には興味深く映るかもしれない。

## ■振り返り

05年度は、市内の2施設と協働でセミナーを開催した。T I Aが入居している施設は、外国語講座や他団体の使用により、十分なスペースのある場所の確保が困難であるということと駐車場が手狭で混雑が予想されることがハード面の理由だが、何よりも重要なことは、T I A単独で開催するよりも他施設を借用することにより、その団体を通じた広報や担当者とのつながりが生じてくるなど、ソフト面における効果・広報などの広がりが今までT I Aにアクセスしなかった参加層の拡大につながるのではないかと期待が持てたことである。特に、広報については、愛知県国際交流協会や名古屋国際センター等の広報紙を効果的に用いて、且つ又、豊田市国際化推進協議会(通称:国際協)国際理解委員会(資料国際理解Ⅱ-①)・地域の交流館や公共施設などへの広報を徹底してはきたが、施設の担当者自身が少なからず関与することにより、より多くの人々への広報の可能性が生じてくるメリットがあった。実際、ちらしを設置するだけでなく、施設の各階に貼付してもらったり、その施設のHPの行事予定にもアップしてもらえたりするなどのバックアップが得られた。これらの点を考慮し、06年度以降もでき得る限り、他施設とのコラボレーションを推進していきたいし、さらに発展して講座の開催に際しては、内容面へのコメントや講師選定などについての相談も協働してできれば国際理解教育の展開に新しい局面



が生じてくる可能性も見込まれる。

併せて、より多くの参加者にこのようなセミナーを体験してもらえよう、内容面での配慮をしていく必要がある。まずは世界に目を向け、体験を通してさまざまな課題を、身近に感じてもらう・幅広い年齢層の参加を促す・教育関係者との繋がり萌芽となるチャンスとする、などの要素を含んだ多少規模を大きくしたセミナーを盛り込んでいくとよいのではないか。それほど大規模なものでもなくとも、テーマの異なる2、3の講座を同日開催する・連続講座形式を採用して総論的に学べる場を設ける等、方法はいくつか考えられる。これらを上記の協働の形と結びつけて実施していることも可能であるし、その方が相乗効果が見込まれるであろう。

ただし、いつまでたっても初歩的な「出発点」の講座オンリーでは、浸透性がなく、「一見さん」対象の一過性のイベントに終始してしまい、教育効果が弱くなってしまわないかという危惧がある。それは、T I Aが中長期ビジョンで掲げている本事業の理念にも叶うものではない。理想的には、年度前半に市民が気軽に参加できる「入門的なセミナー及び講座」を中心に設け、後半はリピーターとなる人々からのリクエストやテーマ性のある深く掘り下げた内容の講座を提供していくことができることである。06年度はその土台作りとして、トライアルで中規模のセミナーをやっけていき、参加者のニーズを捉えていきたい。

## II 推進のための情報発信事業

### 1 国際理解教育ニュースレター発行

国際理解教育に関する情報提供を関係者やボランティアに行うことにより、この分野に対する周知と協力体制の強化を目指す。また、前述した「国際理解教育セミナー」へ、学校現場の教職員や関心のある一般市民の参加を促す契機とする。

- 発行形態 A 4版の両面印刷1枚
- 配布方法 豊田市教育委員会（以下、「市教委」とする）公達便の利用  
ボランティアと関連機関へのT I A情報誌サンフラワーを通じた発送
- 発行回数 年3回（6月・11月・06年2月）
- 発行部数 各2,000部
- 内 容（T I Aホームページ上にて過年度分として掲載）

05年度は第11号から第13号まで発行。セミナーの振り返りや国際理解教育関連の書籍や資料の紹介・ワークショップの開催情報・T I Aの窓口サービスなどを中心に作成した。

特に、セミナーの中で実施されたワークショップの手法の紹介やプログラムの内容提示なども盛り込み、具体的な取組み事例をわかりやすく発信するよう努力した。

## ■効 果

02年度以来、市教委の公達便を利用し、豊田市内の公立小中学校の教師全員に配布、個々の教師の手元に届けることができた。加えて、05年度は市町村合併があり、従来の72校プラス、新豊田市となった市町村の学校担当者にも配布した。

また、セミナーの事前には、関連ちらしを毎回添付して広報を行った。今後も本協会の国際理解教育の周知を図る有効な広報ツールという観点でこのニュースレターを継続していきたい。

## ■課 題

05年度はセミナーへの教員参加者数が伸び悩んだ。夏休みに実施した児童英語関連のセミナーを別にすると、一般市民の関心の高さに比べ、学校現場からの反応が今ひとつなかったように感じられる。考えられる要因としては、総合的な学習の時間の導入から3年が経過し、現場にも考え方やノウハウなどの蓄積がある程度できてきているということ・出身国が複数に亘る外国籍児童生徒の増加により、学校の多様性に膨らみが生じ、校内での「交流」が日常化しつつある学校も増えてきたこと・英語教育を始めとして国際化対応に関する研修が以前よりも開催回数が多くなったこと、等が考えられる。

研修機会の増加は、現場の職員のスキルアップにつながり、大変有意義なものではあるが、国際理解教育の視点とリンクさせた内容のものは多くはないと漏れ聞く。旧豊田市内72校の教員には全員配布しているこのニュースレターで情報を仕入れ、一般市民の参加者と膝をつき合わせながら学ぶ機会となるT I Aの国際理解教育セミナーを個人研鑽とみなしてくれる教員が一人でも増えることを願いながら、06年度以降も充実した内容になるように努めていきたい。

### 3 豊田市国際交流協会 T I A の国際理解教育事業あれこれ はじめに

総合的な学習の時間についての議論が喧しくなりつつある一方で、教材や地域の人材を上手く活用し、創意工夫を凝らした「国際理解」の実践や英語学習の活動が、着実に推進されつつある学校も増えてきている。

T I A ではよりよい「国際理解」の進め方を模索しつつ、先駆的・試行的な手法や内容を地域に紹介し、教師と共有することができる下記のような環境を整備している。

#### 国際理解教育プログラム支援事業

本事業は、単発の交流ではなく、流れのある学習の中で「国際理解」に取り組む現場の先生方や関連機関への助言と相談を兼ねた事業である。T I A のガイドラインに則し、プログラム作りのノウハウや講師派遣を行っている。学校の特色や先生方のオリジナリティを大切にしつつ、「多文化」を始めとした国際理解教育分野の概念を盛り込んだ教育効果の高いプログラムの企画と運営を目的としたものである。

本事業では、地域の外国人や国際協力の分野で活動している T I A のボランティアグループと連携することも多く、地域の人材登用や足元の課題と世界のつながりを意識した方向付けも可能であり、併行して、プログラム作りのヒントともなるよう下記のセミナーも実施している。

#### 国際理解教育セミナー開催事業

T I A では、自ら学び・考え・解決する能力を育むことのできるテーマ選びと環境づくりに活かしてもらえるようなセミナーを開催してきている。

本事業では、「教える側」が実体験できる学びの場として活用できるよう国際理解教育の視点から多種多様なテーマを設け、継続性のある学びに貢献するセミナーと位置づけられている。ここでは 05 年度実施の 2 回分を事例として取り上げ、以下にまとめた。

#### 事例紹介

##### ①「夏期集中 テーマ別小学校わくわく英語セミナー」

講師：町田淳子（BeLL Works 主宰／元 G I T C スタッフ）

参加者：延べ 24 名（小・中学校教員・児童英語教室関係者・T I A ボランティアなど）

目的：国際理解教育の視点を中心に進める手法や教材を紹介し、実践に際しての理念や姿勢を指導者に伝え、授業に活用してもらえることを目指す。

内容：基礎編【人の五感～セルフエスティームを中心に～】前半は英語で国際理解教育を進める強みや進め方を学ぶ。具体的には①国際理解教育とは何か／なぜ英語で行うと効果的なのか②素材は何か（5つの分野：人権教育・環境教育・平和教育・異文化間コミュニケーション・地域と国別研究）③どのように進めるかについて全員で共有。【模擬授業】「人の五感」をテーマにした模擬授業（小学校中・高学年対象）を行った。一人ひとり違う「感覚」を平易な英語で表現しながら、自己と他者の感性を大切にすることの尊さを実感する。

応用編【異文化を題材にした模擬授業】前半は基礎編の復習の後、「大韓民国」をテーマに異文化理解や歴史認識へと学びを深められるよう、教具や教材を使

って体験し、役に立つ英語表現も学ぶ。【指導案作りに挑戦】2日間の総まとめとして4時間分の授業プランをグループで練り、発表して質疑応答の後、意見交換をする。

効果：(参加者感想) 中身のある英語を教えたいが、時間的に難しい。個人ではなく、国や自治体レベルで「小学校英語で何をを目指すのか」を真剣に考えて欲しい／お遊び的な学習では中学校の英語学習とのギャップがあり、積み上げにならない。今回のようなテーマ別学習を行い、意味のある英語を教えたい／英語を負担に感じ、A L T任せの教員も多い。全教員で「何をどう教えるのか」、今日のテーマの内容を共有したいなど

## ②「世界がもし100人の村だったら05版」

講師：平野 木恵 (西三河国際理解教育情報センター主宰)

協力：豊田市中心図書館 (会場・広報・資料提供など)

参加者：22名 (小学生・中学生・会社員・T I Aボランティア・NGO関係者等)

目的：05年より国連による『持続可能な開発のための教育の10年』が始まった。持続可能な開発を行っていくために、他人任せにせず、一人ひとりが自ら学び、他者と学びあい、様々な課題を共に解決していくことのできる力を持つことと、そうした学びの機会が多様にあることを伝える学びの場とする。

内容：【他の国に生まれ変わってみよう】小さなメッセージカードを使い、「他の国の人間になりきって」挨拶や言語、人口などの詳細な情報を共有し、世界の状況を大雑把に把握する。【大陸ごとに分かれよう】世界の人口を縮小し、大陸ごとにグループを作り、自分たちの大陸が抱えている課題や日本とのつながりを考える。【世界の富の不平等を感じよう】ジュースの分配を例にとり、世界の富がいかにアンバランスに分配されているかを体験する。

効果：子どもから大人まで、そして市内はもとより、近隣の市町からも参加者が集い、有意義なワークショップとなった。子どもの新鮮な視点で世界の状況を見ることができた、具体的な数字や世界の貧困状態を体験できる活動は知識だけでは計り知れない問題の深さを学べてよかった、などの感想も耳にした。オープンエンドではなく、今後、行動に移せるように各人がメッセージカードを作成し、本ワークショップから学んだことを文字にして意識化することを働きかけた。

## 国際理解教育ニュースレター発行事業

T I Aでは、03年度からニュースレターを年4回発行してきており、身近な実践例や最新の教材等の紹介も満載して豊田市の小中学校に配布している。

## 今後の課題

インターネットの利用や市民による草の根レベルの交流を推進する一方、前述したように、世界と自分たちとのつながりや地球規模の課題に目を向けるきっかけとなるような学びの場の提供を継続し、そこへの参画をより広範囲に呼び掛けていく必要を感じる。

万博を一過性の交流に終始するだけではなく、これまで以上に有意義な国際理解教育を展開すること、そしてそれを具現化することが肝要と考えられる。

# 多文化共生社会構築に向けての事業

- I 外国人生活相談事業
- II 外国人防災事業

## I 外国人生活相談事業

### ■はじめに

豊田市には、14,620人に上る外国人市民（06年2月末、豊田市市民課調べ）が生活している。多様性を内包し、市の国際化を推進するためには、市民として彼・彼女らの人権が保障され、適切な処遇が受けられるような体制を築くことが肝要である。そのためには、外国人市民が直面している問題の相談に応じ、解決に向かって関係諸機関に働き掛けるとともに、地域社会で自立していくのに必要な情報提供やコミュニケーションが図られていく仕組み作りが必要になる。多言語相談事業はその基盤を成すものである。

これまでも、「通訳派遣制度（00年度より豊田市から委託）」や「外国籍正規職員の登用／ポルトガル語・スペイン語通訳常駐（市民相談課）」が実施され、相談窓口体制の整備が行われてきた。

また、T I Aにおいても03年度から多言語の相談員を試験的に配置し、多言語のニーズを捉える試みが行われ、その結果、05年度からは、中国語相談員の雇用（土曜日午前中）を実現してきている。また、通訳派遣制度も市内の各種団体や病院、教育現場などを中心に展開中である。

以下では、これらに関連したT I Aの取組みの成果を振り返り、外国人が日本で生活する上で直面している諸問題を分析し、今後、解決に繋がる有効な方策の提言材料としたい。

## 1 外国人相談内容の整理と課題

### （1） T I Aにおける外国人相談内容の整理と今後の課題

#### ①相談窓口業務の事業概要

##### a) 事業名 外国人のための休日相談所開設事業

開設時期及び時間 05年4月2日（土）～06年3月26日（日）  
毎週土曜日・日曜日 午前9時～午後5時

相談員	吉岡ユリ子（ブラジル出身）	市内在住
	畑田 恵子（ブラジル出身）	市内在住
	橋村玲奈（エクアドル出身）	市内在住
	糸数ワルベル（ブラジル出身）	市外在住

	美馬明子（ブラジル出身）	市内在住	
	平良アナ（ブラジル出身）	市外在住	
	吉岡ラリサテルミ（ブラジル出身）	市内在住	
	李 萍蘭（中国出身）	市内在住	以上 8 人
内 容	ポルトガル語・スペイン語・中国語による生活相談 ポルトガル語・スペイン語・中国語の翻訳・通訳 在住外国人に関する生活情報等の収集・提供及び、支援方策の調査・提言		

b) 事業名 外国人相談事業

開設時期及び時間 05年4月1日（金）～06年3月30日（金）  
火曜日～日曜日 午前9時～午後5時45分

相談員 T I A事務局職員 7人

内 容 ・生活相談、外国人の市民生活に関わる翻訳・通訳業務。通常は日本語、英語、若干のスペイン語とポルトガル語。必要に応じて、ポルトガル語、スペイン語、中国語、タガログ語、インドネシア語などの通訳・翻訳をボランティア及び多言語センタースタッフの協力を得て解決などに当たる。  
・在住外国人に関する生活情報等の収集・提供及び生活支援方策の調査・提言。

以下、上記の両事業を合わせて報告する。

②2005年度の概況 総相談件数 175件（02年度77件 03年度71件 04年度69件）  
休日のみの相談件数 上記の内51件

05年度は、相談件数が再び上昇に転じた。豊田市民相談課にもポルトガル語・スペイン語通訳の窓口があり、そちらにも多くの相談案件が持ち込まれていると考えられるが、愛知万博開催や周辺市町村との合併、中国語相談の導入など、複合的な要素が加わり、T I Aの窓口にもたらされる相談件数も04年度の倍以上となり大幅増加となった。  
(資料相談－①)

③主な相談項目についての対応例

a) 日本語

日本語の学習に関する問合せは、毎年最も件数の多い相談である。T I A日本語講座、ボランティアグループによる日本語教室等を紹介しているが、いずれも開講と同時に定員一杯となり、募集をストップせざるを得ない状況が慢性化している。

特に近年目立って問合せが多くなってきたのは、東アジア・東南アジア出身の企業研修生の受講であり、同一の職場から数名から場合によっては数十名の学習者がやってくるケースもある。その殆どは、企業の受入れ担当者から一括して日本語学習の場を希望するという一本の電話から始まり、日本人が教室の初日に引率してくる。しか

し、前述した状況により、本来なら特定の企業や団体での受講は、定住化を希望している地域の外国人市民の学習の場を減らすことになるので、地域日本語教室を標榜しているT I Aとしても苦しい立場である。

多くの学習希望者の意向に沿うことができず、ボランティアの慢性的な不足や使用可能な部屋数の不足・駐車スペースの減少などハード面での困難さを抱えている現状も無視できない。T I Aでの教室の受講が適わず、落胆の色が隠せない外国人市民には、本人たちの生活圏に少しでも近い他機関や他団体の日本語教室を案内するよう努めているが、抜本的な解決には至っていない。

社会生活を送る上で、最も基本的かつ重要なツールとしての言語を学ぶ場の安定的な保障を全地域的に展開することが急務であり、可能ならば、ボランティアというよりもある程度の雇用条件を整えて、地域として、講師と教室を整備していくことが切望される。

#### b) 通訳・翻訳

昨今急増しているのは、フィリピン関係の書類である。婚姻や出生に伴う書類の翻訳（英訳・和訳）が圧倒的に多い。クライアントの多くは、日本人男性とフィリピン人女性のカップルであり、女性の殆どは日本語がたどたどしいといった状況である。同様に、ポルトガル語やスペイン語の証明書関係の翻訳依頼もあったが、前半は、相談員が少なく、依頼があっても応じることが適わない場合もあった。

通訳に関しては、土曜日の日本語教室の時間帯に中国語相談員が常駐していたこともあり、窓口での対応が大勢を占めた。その他の言語については後述の「通訳派遣」の項に譲る。

#### c) 保健・医療

保健・医療は、直接生命に関わる基本的な事項であると共に、個人の状況に合わせて相談依頼が生じるものであり、緊急性・重要性の高い通訳依頼もまま寄せられる。この分野については、多言語通訳派遣に該当する内容も多く、厳しい条件の下、対応に苦慮する場面もあった。また、他市の医療機関からの問合せや人材として少ない言語の通訳に対する依頼なども依然として多く、クライアントの要望に沿う解決方法が提示できないことも生じている。

#### d) その他

行政の職員に同行されT I Aにやってきた外国籍女性に対して、手続きの簡単な通訳を依頼された。女性の様子にやや不審な点があったので、事情を尋ねると同行職員がその場での説明を控えた。少し時間を置いて再びその職員に電話で質問したところ女性は、DV\*の被害者であることが判明。T I Aでは、外国籍女性のDV被害者支援の研修を受けたり、市内の専門機関との連携事例も過去に発生していたりするなど、対応経験も少なからずあることから、何らかの形で協力できるかもしれないと伝えた。DVに関しては慎重を期さなければならないが、対処の時期を逸しては本人が考えて

いる以上に深刻な事態となることもある。行政や専門家との連携も必要になってくることから、本人からの申告（DVの程度や今後の対処方法）を待つよりもこちらからある程度積極的に支援の方法を提示することも考えられるので、担当の行政職員に働きかけたが、被害者女性へのアプローチにまでは至らなかった。

T I Aが相談窓口を開設していることと、職員に対応経験があるという認識が相談部署以外の行政窓口職員まで浸透しておらず、行政の対応に食い込むことができなかつたのは悔いが残る。当然のことながら、T I A職員にも守秘義務があり、様々な相談事例への対応経験を有する組織であることを関係者に周知を図ることが急務である。

#### ④今後の課題

外国語による相談窓口は、ことポルトガル語・スペイン語に関しては豊田市が日系ブラジル人の相談員体制を充実させるなど、整備されてきた感がある。T I Aでは、05年度はポルトガル語相談員を豊田市の広報紙にて公募し、複数名確保することができたが、その内1人は学生であるため、今後相談員として定着するかどうかは未知数である。いずれにせよ、新規相談員の人々が定着する環境整備を心掛けたい。また、スペイン語に関しては、母語での対応ができる相談員が常駐していないので、土・日曜日の相談は心許ない。さらに今後は祝日（T I Aは年末年始・ゴールデンウィーク・月曜日以外は全て開館）にもポルトガル語相談を拡充し、急な依頼にも対応していきたい。

従来のポルトガル語相談に加え、05年度からは新たに中国語相談日（毎週土曜日午前9時～正午）を開設。翻訳や通訳など需要がある。また、日本語講座と同一時間帯で相談員が待機することが学習者にとって心強い存在となっている。急増する中国人市民にとっては今後も必要な措置と考えられる。05年4月から導入した土曜日午前中の中国語相談は、日本語教室の受講者を始めとして、中国語通訳が重宝されている。ただし、中国人コミュニティにおいては、他人に悩みを相談したり、助言をもらったりすることを身内の恥とする風潮もある。極力家族や自分一人で解決するようプレッシャーがかかり、相談機関に足を運ぶことができにくい雰囲気もあると聞く。特にDVや病気に関することはクライアントが一人で悩んだり、迷っていたりする内に状況が悪化する可能性も高いので留意する必要がある。06年度は、人材が確保できれば、平日の中国語相談も視野に入れて展開することを試みたい。

※付記：DVについては、愛知県は近年発生件数が全国一である。2006年4月16日付けの朝日新聞によると、「05年度に全国の婦人相談所などに保護された外国人被害者112人のうち、県内は37人で最多だったことも報告された。」とある。

#### (2) 多言語通訳派遣事業

■目的 『平成15年度（2003年度）豊田市国際推進事業報告書』12ページ参照。



03年度と重複する為ここでは割愛

## ■内 容

外国人市民の生活相談、あるいは行政サービス等における説明・情報提供に関して、窓口だけでは対応できず、通訳補助が必要なケースに通訳派遣を行う。ただし、原則として、人権に関わること、人命や事故に関わる急務であることが最優先の派遣対象とする。また、個人的な文通や人間関係については、本事業の対象外とする。

- 派遣範囲
- 1)外国人市民の人権に関わる生活相談・情報提供に必要な通訳
  - 2)法律等専門的かつ複雑な知識・技能が必要とされるケースは除く。
  - 3)緊急のケースで人材確保が不可能な場合は対応できない場合もある。
- 手 続 き
- 1)ニーズが発生した個人又は組織からT I Aに通訳派遣の依頼をする。
  - 2)T I Aが、通訳ボランティアで対応できる内容かどうかを判断する。
  - 3)T I Aが対応可能と判断したときは、通訳ボランティアに連絡を取り、承諾が得られた場合に派遣する。
- 対応言語
- ポルトガル語／スペイン語／英語／中国語（北京語・上海語）／韓国・朝鮮語／タガログ語
- そ の 他
- ・通訳派遣は1案件原則2回まで。
  - ・通訳ボランティアには、T I Aから些少ではあるが報償金を支払う。
  - ・直前の依頼には対応できないことがある。
- 実 績
- 依頼件数 9件  
(依頼機関別：市立保育園1件 病院1件 国際交流団体7件)  
(言語別：韓国語1件 スペイン語1件 タガログ語1件 英語6件)  
(内容別：医療1件 保育園1件 NGO1件 公共団体6件)  
総派遣回数 延べ10回（1件につき2回派遣したケースあり）  
通訳者数 15人  
(スペイン語1人 韓国語1人 タガログ語1人 英語12人)
- 課 題
- 依然として病院関係者からの依頼が多く、派遣までには至らなかったが、「オーバーステイの患者が瀕死の状態、亡くなった場合に備え、本国への遺体埋葬の方法を教えて欲しい」や「複数の結核患者が診察に来ているが、標準中国語が通じない。何語で説明したらよいか」など通訳の範疇を超えた問合わせも多々ある。また、病状や薬の種類・服薬の仕方の通訳以外に、入院費の支払い方法・期限など患者にとっては、健康なときならいざ知らず、病身の身に厳しい内容を提示し、通訳者に選択を迫る役回りをさせる場面も見受けられる。病院のソーシャルワーカーにとっては、大切な案件かもしれないが、「言いにくいことを代わりに通訳してもらっている」感が拭えない。通訳の範囲を逸脱することがない

よう同行する職員は心掛けているが、依頼側の認識の甘さにより円滑な通訳派遣に支障をきたす結果を招きかねない。事前の打合せや依頼側への確認事項を把握し、より適正な派遣を行っていくことが必須である。

## Ⅱ 外国人防災事業

### 1 外国人集住地域における防災啓発事業

- 目的 外国人市民が増加する豊田市において大規模災害の発生に伴う地域の課題や求められる対応方法を、阪神淡路大震災や新潟中越地震の事例から学ぶ機会を作ることにより、外国人市民の多い地域で必要とされる防災対策の啓発と推進を図る。
- 背景 保見地域での防災啓発事業を思案していた所、地域で活動をしている（特活）保見ヶ丘国際交流センター（以下「センター」とする）が同様の事業を行なうことを知り、本事業を共同で開催することとなった。センターが講演内容の検討や講師の選定を始めていたため、T I Aは主に広報活動や市担当課の協力要請などを担当した。
- 日程 <第1回> 06年2月26日（日）  
<第2回> 06年3月26日（日）
- 内容 <第1回> 「あれから11年…阪神大震災の体験談を聞く」  
講師：タバリス・ジョゼ氏他（関西ブラジルコミュニティメンバー）  
参加者：37人  
保見地域のブラジル人を対象に実施。神戸に在住するブラジル人講師を招き、自らの震災体験を母語のポルトガル語で語ってもらう機会とした。講演会の後はブラジル料理を交えての交流会と、市防災課から提供を受けた非常食調理の実演を行なった。  
<第2回> 「防災！そのまえ・そのとき・そのあと」  
講師：田村太郎氏（特活多文化共生センター理事）  
参加者：40人  
阪神や中越地震での外国人被災者支援への対応に経験豊富な講師が「多文化なまちの防災」について講演。自治区関係者や地域のボランティアが外国人住民を念頭に入れた予防防災や災害発生後の対応について学んだ。
- 場所 都市再生機構保見団地 141 棟第2集会室
- 効果 印象的であったのは第2回目の講演での講師のことばである。ことばの壁や生活習慣の違い、災害に対する知識や経験の差などをフォローするた

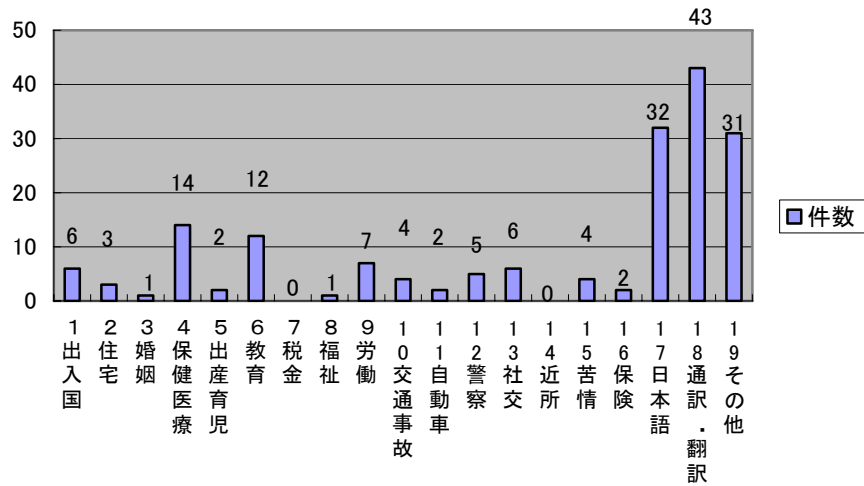
め、避難所生活の中では外国人被災者特有のニーズがあり、それに対する配慮が求められるが、これは外国人に限ったことではないこと。地域には子どもや高齢者、妊婦や病人など、多様なニーズを持った住民が存在し、彼らのニーズを念頭に入れた避難所運営に日頃から備えておくことが、結果として現在注目されている「避難所生活の質の向上」に繋がっていくという。豊富な知識や経験に裏打ちされた講演は、多様な住民が住む保見地域での防災を考えるのにふさわしい学びの多い内容であった。当日の参加者は保見地区の自治区関係者や自主防災会など、主催者の予想を超えた数の参加者が得られたが、これは地域とのパイプを持っている保見ヶ丘国際交流センターの存在が大きいと思われ、今回の講演が今後の地域防災に活かされていくことを望みたい。

## ■ 課 題

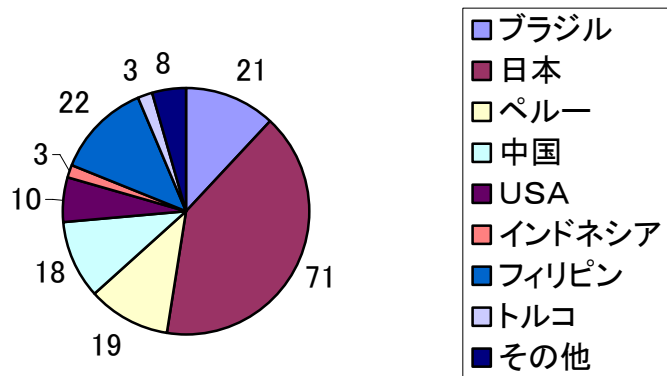
第一回目の講座では、ポルトガル語のちらしを周辺の小中学校やブラジル人学校の在籍者に配布し、同じ出身国の講師から母語で震災の話聞くためのブラジル人向けのイベントであることをアピールしたにも関わらず、当日のブラジル人当事者の参加者は10人にも満たない結果となり、ただ呼びかけて参加者を待っていることへの限界を感じる事となった。防災は人命にも関わる重要なテーマである一方で、エンターテイメント的な内容に乏しく、ややもすると参加者を巻き込みにくいことも否定できない。今後防災をテーマにした催しを行う時は、それ単独で行うよりも学校やイベントに組み込むといった実施方法の工夫や、彼らが集まる場へこちらから出向いていくなどの発想の転換が求められることを痛感している。

【外国籍市民相談統計データ2005年度】

05年度外国人相談項目別集計



05国籍別相談者数(人)



2005年度曜日別相談件数

